

臨地実習Ⅱ 報告

本学は専門職大学として、臨地実習に多大な時間を割いている。学生たちは少人数のゼミに分かれ、繊維産業に関連する実習先に向かう。そこで地域の伝統技術を学び、新しいファッション知財を海外に発信することを目標としている。以下は3年次に実施される「臨地実習Ⅱ」について報告である。

実習先と担当教員は以下の通りである。

【東京キャンパス】

- 岡村織物、澤井織物工場、株式会社成和ネクタイ研究所（永澤陽一・今村淳・梅木典子）
- 株式会社 富田染工芸、上落合発展会（古田祐幸・村上勝）
- サンプリーツ株式会社（後藤圭介・林成光）
- 群馬県桐生市近郊の繊維関連企業約20社（平井秀樹・丹羽朋子）
- 東京ニットファッション工業組合（松岡依里子・篠原航平）
- 株式会社 黒沼染工場（倉内尚士・熊田陽子）

【大阪キャンパス】

- 妙中パイル織物株式会社（藤井輝之）
- クマムレース株式会社（高原昌彦）
- 松尾捺染株式会社（三木勘也）
- 任意団体 いとへん universe（高山遼太）

【名古屋キャンパス】

- 株式会社 カネコ小兵製陶所（奥村潔）
- おぼろタオル株式会社（大島一豊）
- テキスタイルマテリアルセンター、毛織会館、公益財団法人 一宮地場産業ファッションデザインセンター（高間由美子・小山有子）
- 株式会社 山勝染工（廣田緑）
- 有限会社 絞染色 久野染工場（守屋孝典・藤沢亮太郎）

【東京キャンパス 報告①】

担当教員	永澤陽一・今村淳・梅木典子
ゼミ生数	9名
実習先名（製品）	①岡村織物（織物、スカーフ、マフラー） ②澤井織物工場（織物、スカーフ、マフラー） ③株式会社成和ネクタイ研究所（織物、ネクタイ）
実習先住所	東京都八王子市 ①中野上町 ②高月町 ③北野町 ① 2名：2021年6月3日～2022年1月31日 ② 3名：2021年5月11日～11月5日、2名：2021年7月6日～ 2022年1月19日 ③ 2名：2021年6月9日～2022年1月29日
実習期間	

ネクタイやストールの産地である八王子の歴史は古く、平安時代末期には絹織物が生産されていた。江戸時代後期には養蚕・製糸・織物が盛んなことから「桑都（そうと）」として知られ、明治以降はジャガード織物や力織機などの導入により、織物産地として大きく発展した。数百年間守られた伝統の技を駆使してつくられた織物「多摩織」は伝統工芸品に指定されている。本ゼミは、八王子産地のテキスタイルを発信するオリジナルブランド「SOTO」を企画し、フランスのブランドコンサルティング会社、ネリーロディ本社に提案することを最終目標とした。

実習先の選定にあたっては、八王子織物工業組合の協力を得て同組合所属企業に実習の取り組みを提案し、興味を持っていただいた6社に本学の特色や海外企業に企画提案をする主旨のプレゼンテーションを行い、賛同いただいた3社にて実習を行った。

実習開始を前に3社の工場見学をしたが、各学生は1社で実習を行うため、特色の異なる3社の企業に訪問できたことは産地を知るうえで意義があった。また実習前講義として、前期の地域企業・地域連携ゼミで、本学東京キャンパスの捧恭子教授による2回の特別講義を通じてレザー素材と銅素材についての知識を習得するとともに、アドビイラストレー

ターやフォトショップを使用したテキスタイルパターンデザインのデザイン方法によって、ジャカード織機を使用したオリジナルのテキスタイルを作成できるスキルを習得した。

3社の概要と実習内容は、以下の通りである。

岡村織物はドビー織機、ジャカード織機、レピア織機を保有する織物工場である。実習内容は主として、工場での経糸のセット手伝い（綜統通しなど）や八王子組合主催のネクタイ展向けにネクタイ柄の企画であった。その他、全国産地横断型個展合同商談会T・N JAPAN 東京展（2022 春夏）に販売員として参加し、客のアテンドや展示の手伝いを行った。岡村清社長のご厚意により、学生は織機を借りて自由に制作・研究を行うことができた。

江戸時代から続く澤井織物工業は創業以来、着物地を織り続けている織屋である。伝統工芸品「多摩織」で培った技術を生かして生地を開発を行っており、手織り機や動力織機（機械）で作られたオリジナルの生地やアイテムは、国内外のハイブランドに納入されている。実習では同社のアーカイブの整理や織機のセット（綜統通しなど）などの実務を行いながら、学生は各自でオリジナルテキスタイルの自主制作・研究を行い、同社の参加する催事関連商品のデザインを企画することもあった。澤井伸社長の紹介により八王子産

地の約7割が利用している繊維整理加工場の有限会社 大恵へ伺い、多種多様な繊維製品の加工整理の工程を見学した。学生は、織物が糸から製織、整理加工を経て製品になる工程を現場で見ることができた。

成和ネクタイ研究所はネクタイ用ジャガード織機を中心とした工場である。実習では反物の検反、ネクタイ柄の生地見本帳(約3万柄をアーカイブしている)の整理、ネクタイ柄の企画などを行った。工場見学では、全国で受け継がれてきた貴重な織機や道具などを収蔵している同社の「機(はた)資料館」を訪れ、織物文化の歴史に触れることができた。

本ゼミでは最終成果として、八王子産地を世界に発信するために、シルクに特化したテキスタイルブランド SOTO を企画した。ブランドコンセプトは「日本のクラフツマンシップをリフレッシュし、世界に発信する」ことである。デザインテーマを「自然」とし、学生は各自、実習先企業にてオリジナルのテキスタイルの制作に取り組み、SOTO のテキスタイルコレクションとして発表した。制作したテキスタイルは、単なる作品ではなく商品として成立するようブランドのターゲット像や生地値を詳細に設定した。

ネリーロディ本社へ同ブランドをプレゼン

SOTO
TOKYO

図1 オリジナルテキスタイルブランド SOTO ロゴ
(作成者：浜名悠)

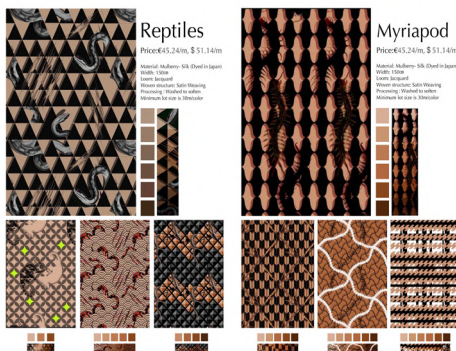


図2 SOTO テキスタイルデザイン
(作成者：阿部美咲)

テーションするにあたり、下記の授業運営を行った。①後期の地域企業・地域連携ゼミおよび国際連携ゼミを今村の指導のもと、すべて英語で行った。②永澤の紹介により、ビジュアルマーチャンダイザーとしてハイブランドのアートディレクションを数多く手掛けているステファン・センギエール (Stephane Sengier) 氏に対し、SOTO ブランドのオンライン・プレゼンテーションを行い(写真1)、同氏からの具体的な助言をもとにポートフォリオの内容を修正してネリーロディ本社へのプレゼンに備えた。コミュニケーションはすべて英語だったにもかかわらず、英語が得意な学生が全体を牽引し、全員がしっかりと同氏との意思疎通を図っていたことが印象的だった。実習受け入れ先企業にもオンラインにて学生最終発表会を行い、1年間の成果を報告する予定である。

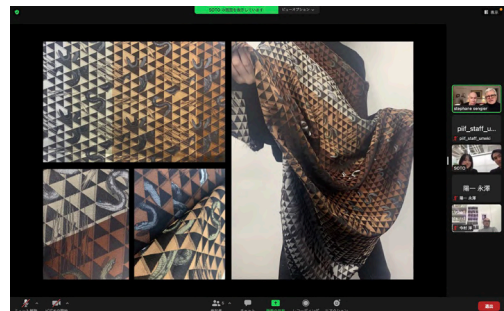


写真1 センギエール氏への SOTO オンラインプレゼンテーションのスクリーンショット
(2022年1月15日梅木撮影)

学生は長期にわたる工場での実務経験を積みながら、オリジナル生地を自主制作した。ネリーロディ本社へのプレゼンテーションという明確なゴールに向かい、単なる自主制作に留まることなく、実習先企業の協力を得て、SOTO というオリジナルのテキスタイルブランドをブランディングしたことは大きな成果であった。ネリーロディ本社へのプレゼンテーションはまだ終了していないため報告はできないが、次年度の卒業制作へと続く基礎研究となる、有意義な臨地実習であったと感じている。

【東京キャンパス 報告②】

担当教員	古田祐幸・村上勝
ゼミ生数	13名
実習先名（製品）	①株式会社 富田染工芸（江戸小紋） ②上落合発展会（商店街）
実習先住所	①東京都新宿区西早稲田 ②東京都新宿区上落合
実習期間	2021年4月10日～2022年1月31日

本ゼミにおける実習は2つのプロジェクトを並行して進めるかたちで実施した。具体的には新宿区の株式会社 富田染工芸で「江戸小紋」について、その歴史や成り立ち、詳細な技法についての学びと、同じく新宿区の産業振興会が取り組んでいる「上落合発展会」（いわゆる商店街）に人を呼び込むための企画への参加である。実習先として同地を選定したのは、伝統工芸というと一般的には東京から離れた地方の産業をイメージしがちであるが、自分たちの生活圏である都会にも、いまなお息づいているということを知ってもらいたかったという理由が大きい。

まずは前者について報告する。株式会社富田染工芸は1914年に創業された100年

以上の歴史を持つ企業であり、50年以上のキャリアを持つ職人たちが同社の事業を支えている。本学の東京キャンパスに通う学生たちにとって非常に身近な都心・新宿に根付く伝統工芸の現状と今後の展開を、富田篤社長や職人の方々とともに探っていくことが目的である。古き良き伝統を守り続けていくことはもちろんだが、富田社長自身、新たな技術を用いたビジネスモデルの模索にも注力しており、たとえば、本来は防染に用いられていた江戸小紋の型紙や技法をさまざまな素材にプリントして商品化することなどを行っている。

本ゼミが始動した2021年5月には、まず、富田染工芸にて江戸小紋の歴史と成り立ちに



写真1,2 糊置きと完成した友禅①（糊置き：2021年6月9日／友禅：7月21日古田撮影）



写真 3,4 糊置きと完成した友禅②（糊置き：2021年6月9日／友禅：7月21日古田撮影）

ついて講義をいただき、6月から7月にかけては、同社にて実際にヘラの使い方や糊置きの仕方などを学びつつ、型紙を使用して染色の工程を体験させていただいた。他にも江戸小紋とは異なる技法として手描き友禅についても講義、実習を実施していただいた。学生たちは普段の教室での授業とは趣を異にする実習に非常に前向きに取り組んでおり、富田社長や職人の方々に自ら指導をお願いしたり質問を投げかける場面も多々見受けられた。職人の世界というものを身をもって体験するという、またとない良い機会であったと思わ

れる。同時に歴史ある伝統技術を継承していくことの困難さについても併せて感じることができたようである。

さらに、今年度は富田染工芸で学んだ職人の技術とイタリアの皮革メーカー、ドモドッソラ社が持つ革加工技術の融合をテーマに、ドモドッソラ社に企画を提案することになった。従って、夏季休暇明けの10月以降はドモドッソラに向けたプレゼンテーションのためのアイデア出しからサンプル作成、PowerPointの資料作成を行った。プレゼンテーションは1月31日に終了し、ドモドッ



写真 5 試作サンプルのDOMO ペンケース（2022年1月12日古田撮影）

ソラ社から大きな関心を寄せていただいた。

つぎに、本ゼミのもうひとつの柱である上落合発展会の支援企画について報告する。同会は新宿区の上落合周辺の商店や企業によって形成された組合であり、商店街の加盟店の中には染色業も数店含まれている。上落合地区は1丁目から3丁目に約1万世帯を擁し、比較的年配の住民が多くみられる一方、25～34歳の若い世代も決して少なくない。富田染工芸のある早稲田からもさほど遠からぬエリアである。現在、上落合発展会を基盤とする地域活性のための3カ年計画が進行中で（本年度はその1年目にあたる）、ここに本ゼミの学生たちが参加し、学習と並行としてさまざまな提案を行っていくことが目的である。上落合地区はファッションビジネス学科の学生たちが2年次に授業の題材として扱った経緯があるため、今回の実習先としても数ある商店会の中から同地を選択した。

5月にはまず上落合についてのリサーチ、ヒアリング、収集したデータの分析を行い、6月には同地域をより多くの人たちに知ってもらうための手法を議論し提案を行った。7月にはコンテンツを決定し、Googleマップへの情報および写真の追加、インスタグラムとLINEアカウントへの投稿、さらにはそれらを周知するためのポスターを制作することとなった。後期に入り10月にはコンテンツごとに情報の収集と整理、11月にはコンテンツサンプルを作成して上落合発展会に途中経過報告、12月には各コンテンツの仕上げ、

ポスターの最終チェック、そして、年明けの2022年1月から上記の各メディアへそれぞれ情報の投稿を開始した。学生たちは、ともすると面倒な作業にもなりかねないリサーチにもしっかりと対応し、必要かつ有用な情報を的確にピックアップしてきていた。今後さらに追加していったほうがよいと思われる情報や画像はもちろんあるものの、現時点で可能なことはほぼすべてやり切れたのではないかと考えている。



写真6 上落合ポスター
(2022年11月、ポスティング)

【東京キャンパス 報告③】

担当教員	後藤圭介・林成光
ゼミ生数	20名
実習先名（製品）	サンプリーツ株式会社（プリーツ）
実習先住所	東京都あきる野市下代継
実習期間	2021年6月29日～10月14日

昭和52年創業のサンプリーツ株式会社は、ファッション衣料を中心に、プリーツ製品の時代の変革をリードする企業であり、プリーツ加工を通して、衣服の美とつねに向き合い、新しい文化の創造に日々、取り組んでいる。一流ファッションブランドを含む、100を超える会社からプリーツ加工を委託されており、最近では加工のみならず、プリーツを使った製品の開発、提案まで行っている。

プリーツ加工は、学生服のスカートなどで馴染みのある、布地にヒダや折り目をつける加工である。現在では制服や礼服のみならず、ファッションの最先端の領域で多用され、数々の有名ファッションブランドが毎年のコレクションの中で、新しいプリーツ製品を生み出すようになっている。いまやプリーツ加工は、染加工、プリント加工と並んで、ファッションデザインの幅を広げるためには不可欠な加工になっているのである。その理由は、プリーツ加工に、①平面が魔法のように立体になっていくプロセスのおもしろさ、②それが生み出す、意外性を持った造形や装飾の美しさ、③現代の衣服に欠かせない機能性、という、衣服として欠かせない要素以上に、従来の服作りにはない新しい考え方や方法をも実現できる可能性があるからである。本ゼミでは、本学の掲げる「服の、先へ」を探求する大きな方向性の一つとして、学生にプリーツ加工を知り、体験し、その可能性を感じてもらうことを目的に、この実習先を選択した。

実習では、学生は実際のプリーツ加工ラインに従業員として参加し、製品の加工作業に

携わることで、裁断から縫製、加工までの一連の工程を学んだ。その経験をもとに、実際にプリーツ加工を用いたオリジナルのスカート、スカートを工場で作成した。さらにゼミと連動して、自らデザインし、パターンを作り、工場とのやり取りの中でプリーツ加工をさらに理解し、工夫しながら最終成果物としてのオリジナルプリーツ作品を制作した。

プリーツ加工には、さまざまな工法がある。学生は以下のようなプリーツ加工について、現場で実物を前に講義を受け、加工方法の違いとそれによる効果の違いについて学んだ。マシンプリーツとは、プリーツ専用機を使用してヒダ付けを行う方法である（写真1）。2本の熱ローラーの間にナイフエッジで生地を送り込み、ヒダを付けながら熱ローラーでセットして定着させる。細かいプリーツ加工に適している。

ハンドプリーツとは、あらかじめ型をつけた2枚の型紙（カルトン）の間に裁断された生地を挟み込み、たたみ込んでヒダ付けを行う方法で、その後、セットボックス（窯）



写真1 マシンプリーツ加工のプリーツ専用機
（写真はすべて2021年4月22日後藤撮影）

を用いて蒸気熱でセットして定着させる（写真2、3）。オリジナル型紙作成は、コストと時間がかかり、手で折るため、細かいプリーツには不向きだが、平行およびテーパ（裾に向かって広がる形）付きのプリーツが可能である。

他にも、型を使わず手でヒダ付けを行う方法などもあり（写真4、5）、それらの手法を理解するために、工場スタッフから直接、講

義と指導を受けた（写真6、7、8、9）。

今回は実習受け入れ先のご厚意により、これらの工法の特徴について詳しく丁寧に講義と指導をしていただくことができた。このような技術を学ぶ機会は大変貴重であり、学生は実習先で得た情報についての責任も理解しながら熱心に聞いていた。これらの講義や指導で得た知識を活かして、学生はさまざまな挑戦をしながら自分の作品を制作した。その

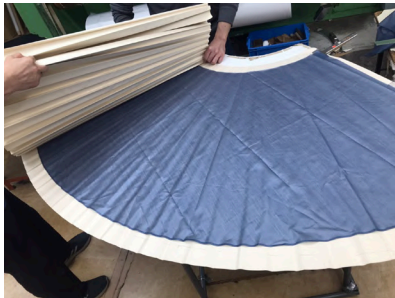


写真2 ハンドプリーツ加工



写真5 ハンドプリーツ加工



写真3 セットボックス（釜）



写真6 マシンプリーツ加工を行っている様子



写真4 ハンドプリーツ加工



写真7 ハンドプリーツ加工を行っている様子



写真 8、9 プリーツ加工の講義の様子

作品群には学生個々のアイデアがあり、実際に制作してみると、思った以上の形になったものだけでなく、想像した通りにいかなかったものや、失敗と言わざるを得ないものもあったが、制作してみてもはじめてわかる収穫の方が大きかったのではないかと思う。そして、結果的にはプリーツ加工をファッションの現場で活用できる可能性を大いに実感でき

たのではないだろうか。この経験を通して、学生は、アイデアを形にするためには技術についての深い理解が必要であることを理解することができ、非常に有意義な実習となった。卒業制作にもこのプリーツ加工を使いたいという学生の声もあり、ぜひ活用してもらいたいと思う。

【東京キャンパス 報告④】

担当教員	平井秀樹・丹羽朋子
ゼミ生数	20名
実習先名（製品）	桐生市近郊の繊維関連企業約20社（絹織物）
実習先住所	群馬県桐生市
実習期間	2021年4月10日～2022年1月29日

2021年度の平井ゼミは、古くから西の西陣、東の桐生と呼ばれるほど絹織物で栄え、現在は絹織物以外も含めた複合産地として日本でもトップクラスの実力を誇る群馬県の桐生市を研究フィールドとした。桐生をフィールドとした理由は、桐生テキスタイルマンス代表の星野智昭氏、桐生ファッションウィーク2021実行委員長の星野麻実氏のお二人に、現地コーディネーターとして支援をいただくことができたからである。本ゼミは大きく3つの方向性で運営した。第1は、桐生

産地の魅力を紹介する書籍（電子書籍としても公開）の制作である。これは、6つのグループに分かれて桐生産地で調査を行った。第2は、記録映像アーカイブの制作である。これは4名の動画班を組織し、ゼミの様子を動画にまとめて本学公式YouTubeなどで配信した。第3は、桐生の染め直し実習と企画展である。これは、10月の桐生ファッションウィークの期間中に、有隣館煉瓦蔵でイベントを開催した。ゼミの実習の様子は、多数のメディアに掲載された。



写真1 井清織物（OLN）のショップ
（写真1～4はすべて2021年7月5日平井撮影）



写真3 織物参考館・紫（ゆかり）にて手織り体験



写真2 シャトル織機の工場見学



写真4 藍染を体験



写真5 KTM 運営メンバーとゼミ生
(2021年10月31日 Michi Ishihara (M.inc) 撮影)

1 前期の活動報告

2021年4月10日に本ゼミはスタートしたが、コロナ禍で移動が制限され、ゼミの運営は困難を極めた。7月に入り緊急事態宣言が解除され、1泊2日の桐生産地概論ツアーを開催した。織物参考館・紫（ゆかり）にて藍染を体験し、桐生に移住したデザイナー夫婦のファッションオープンアトリエ×ボードゲームカフェのふふふ、セレクトショップのエスティエ・カンパニー、刺繍のユニマーク、ハンドル刺繍のハンドラー、ジャカードの織布工場の須裁、ファクトリーブランド「OLN（オルン）」を展開する井清（いのきよ）織物、染色整理の朝倉染布などを視察した（写真1～4）。

2 後期の活動報告

9月24日から26日まで、創業100年を超える染色工場である桐染にて染色実習を行った。学生が愛着を持って使用していたが、シミなどで着なくなった古着を持ち寄り、伝統技法である籠染めや抜染、タイダイなどの技法で染め直すことで服に新たな命を吹き込むというコンセプトである。

さらに、10月30日から11月3日までの桐生ファッションウィークの期間中、有隣館煉瓦蔵で開催された桐生テキスタイルマン

スのファイナルイベントと連携して、3つのイベントを企画運営した（写真5）。第1は、9月に桐染で行った染め直し作品の展示である。天井から作品を吊るすことで鮮やかで躍動感のある展示になった（写真6～8）。第2は、ファッション・スワップミートである。「自分にとっていらない服が交換することで誰かの価値になる」をコンセプトに、服や雑貨を物々交換するアップサイクルのイベントである。第3は、本学のゼミ生と群馬大学を中心とした起業グループ「Yield（イールド）」とのトークセッションで、「内から見た桐生、外から見た桐生、僕たちが見据える未来」というテーマで本音トークを繰り広げた（写真9～10）。

さらに着物の新しい着こなし提案「きものかわいい」と連携し、学生が着物を着用し、着物の新たな着こなし提案を行った（写真11）。

その合間をぬって、桐生の魅力を書籍にまとめるため、6班に分かれてフィールドワークを展開した。各班は、「刺繍」「シルク」「織物」「桐生発のブランド」などのテーマに沿って複数の取引先を訪問し、インタビューを行った。たとえば、「桐生産地の歴史を探った」1班は、桐生織物記念館で桐生織の技法について学び、さらに大川美術館で開催され



写真 6,7 桐染にて籠染めの染め直し実習
(2021年9月26日星野智昭撮影)



写真 8 染め直し作品の展示
(写真8～11はすべて2021年10月31日平井撮影)



写真 9 学生によるトークセッション



写真 10 ファッション・スワップミート



写真 11 着物で接客するゼミ生

た「KIRYU POP」展を訪れて、テキスタイル・プランナー新井淳一氏の長女である新井求美氏と、スカジャンの発祥の地でもある桐生について、桐生ジャンパー研究所の松平博政氏にインタビューを実施した。

テキスタイルの素材を生み出す企業の調査では、受け入れ先のご協力のもと、糸作りからひいては養蚕の現場、さらに染めの技術を支える「水」が注ぐ桐生川上流域にまで足を

運び、桐生産地のものづくりを多面的に捉える視点を得ることができた。同時に複合産地たる桐生の織物や刺繍の技術の粋を集めた製品づくりに挑み、ユーザーと桐生をつなぐ場づくりに奔走する気概あふれたクリエイターと交流し、「日本の産地とともに服を生み出す」仕事の醍醐味やその大きな可能性に直に触れることができたのも、学生にとって大きな収穫であった。

【東京キャンパス 報告⑤】

担当教員	松岡依里子・篠原航平
ゼミ生数	11名
実習先名（製品）	東京ニットファッション工業組合（TKF）（ニット）
実習先住所	東京都墨田区両国（TKF 会館）、他 TKF 所属企業
実習期間	2021年5月12日～2022年1月29日

本ゼミの目的は、墨田区近郊で東京ニットファッション工業組合（以下、TKF）に所属している企業のプロモーション活動を支援することであった。

墨田ニット産地の起源は江戸期の武士による副業に遡ることができる。以来、同地ではメリヤス産業が栄え、その一大拠点となり、国内におけるメリヤス産業の発祥の地となった。明治期にはメリヤスをはじめとした国を挙げての産業の創造、さらには国富増強という方針のもとにさらなる発展を遂げる。こうした興味深い背景が同地を実習場所として選択した理由である。

TKFはニット生地ならびに製品の製造を営む中小企業の経営の改善と発展、合理化を図ることを目的として、昭和24年に中小企業等協同組合法のもと、正式に法人格を持つ団体として発足した。所属する企業は墨田区、江戸川区、江東区、葛飾区に広がっており、令和3年3月末の時点で173社となっている。

本ゼミの進め方については、TKF所属の企業や担当者との事前ミーティング、企業見学により内容を検討した。その結果、工場のプロモーション（具体的にはホームページの

リニューアル、SNSによる拡散）とサステナブルな取り組みの2つを課題とすることにした。従来、アパレル工場は大手ファッションブランドから発注を受託するというOEM（original equipment manufacturer）型ビジネスで成り立っており、プロモーションの必要性もなく、ファッション業界の仕組みのなかでうまく機能していたが、昨今、生産国が中国を中心とする海外に移行する中、国内だけですべてを完結することは厳しい状況となっている。そのため、ファクトリーブランドや小ロット生産などの新たなビジネスを再構築する必要があると考えている企業は多い。そうした現状を踏まえ、本ゼミではTKFに所属する多くの企業のプロモーションを行い、企業と学生が協働できる仕組みをつくることを目標として設定した（図1）。

2021年5月の初回は、まず墨田区のニット産地としての歴史を学び、現状の把握とニットに関する基本的な内容を習得すべくTKF会館にて研修を受けた。2回目は、TKF青年部（各企業の後継者）の方々とディスカッションを行った。

つぎに、アパレル工場がどのような状況であるのかを調査した。現在ほとんどの企業は

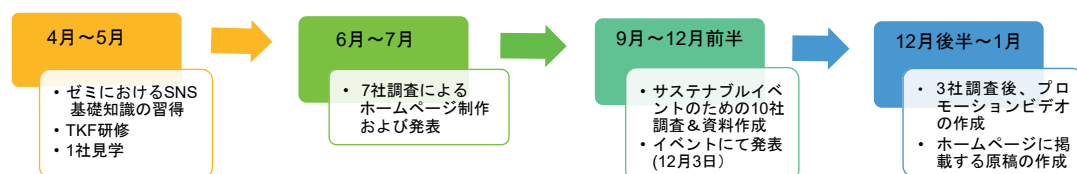


図1 2021年度の臨地実習およびゼミの流れ

工場を国内の地方に置いており、東京でパターンから縫製まで見学できる場所は少ないが、谷繊維工業は都内でも数少ない一貫生産管理（編み立て、染色整理加工、縫製、仕上げ）の現場を見学できることから、同社で研修を受けた。この会社は江戸川区でカットソーアイテムの縫製業を営んでいる。世界に数社しかない旧式の吊り編み機を使った定番生地は20年以上生産されており、和歌山を中心にした産地企業との信頼関係が高品質な商品の安定供給につながっている。「丸セット丸裁断丸起毛」（写真1）という昔ながらの技法が特徴である。アメリカンカジュアルウェアのスウェットやTシャツなどの定番品が主な製品（写真2）で、小ロット生産を強みにインフルエンサーとの取り組みも始め



写真1 吊り編み機（2021年5月24日松岡撮影）



写真2 製品確認の様子（2021年5月24日松岡撮影）

ている。

6月からは3班にわかれ、TKFのホームページに掲載するため各企業の調査とインタビューを開始した。まず、丸和繊維工業株式会社、株式会社芦田ニット、株式会社ピーコンポ、株式会社川島メリヤス製造所、株式会社ナラハラニット、伊東メリヤス工業株式会社、中橋莫大小株式会社の7社を訪問した。7月には取材内容をもとにホームページを作成し、TKF役員の前でプレゼンテーションを行った。

12月にTKF青年部と「サステナブル」についてのイベントを行うことになり、企画会議後、内容はTKFに所属する企業とのトークセッションとなった。9月からも3班にわかれ、「サステナブル」に取り組んでいる株式会社ナラハラニット、大石メリヤス株式会社、キップス株式会社、有限会社オフィスホドタ、株式会社ズーム、丸和繊維工業株式会社、佐藤莫大小株式会社、丸安毛糸株式会社、阪和株式会社、株式会社小倉メリヤス製造所の10社に入念かつ詳細な調査を行った。12月3日に開催されたイベントの様子（写真3）は、『織研新聞』（写真4）『繊維ニュース』『信用情報』、そしてTKFのホームページにも掲載された。

学生はTKFの企業へ「認知のためのSNSなどの発信強化」「工場発のブランド」「服飾系学校との連携」「端材によるサステナブル



写真3 TKF × PIIF サステナブルイベント
（2021年12月3日松岡撮影）

持続可能性で共催イベント

TKFと国際フッ
ション専門職大学

相互理解を深める



学生は現状の調査やTKFの企業にインタビューした内容を発表

東京ニットフッション工業組合(TKF)青年部と、国際フッション専門職大学の松岡依里子ゼミは共同で、サステイナビリティー(持続可能性)について考える取り組みを行い、12月3日に東京・すみだ産業会館で交流イベントを開いた。参加したのはTKFの青年部を中心とした組合員と、国際フッション学部松岡依里子ゼミの学生11人。イベント当日は学生は

3班に分かれ、3カ月かけて調べた内容とTKF組合員10社へのインタビューを発表。組合員と持続可能性について意見を交わし、理解を深めた。同校は国内産地との提携や現場実習に力を入れており、松岡ゼミはTKFと今秋から、サステイナビリティーをテーマにした取り組みを開始。今後は産材を利用したワークショップなども検討しているが、1回目の今回は班別に、国内外の現状と企業の取り組み事例について調査を実施。TKFの「トウキョウ・ニット」認証企業を訪問し、各社が実践中の持続可能性に関する取り組みのインタビューも行った。イベント当日に発表した。質疑応答も活発で、学生は訪問先の企業にSNSを活用した発信の強化などを提言。企業と学生の双方が考えるサステイナビリティーについて議論し、相互理解を深める機会となった。

写真4 『織研新聞』(2021年12月15日掲載)

ブランドの提案」「他業界との連携」「ノーマライゼーション」「循環型生産の活性化」「労働年齢の高齢化による人材育成&獲得」などを提案し、その後、企業とのトークセッションを行った。

イベント終了後は、TKFのホームページを改訂することとなり、学生は制作ディレクターのもとプロモーションビデオを作成した。12月から2022年1月にかけては、株式会社芦田ニット、伊東メリヤス工業株式会社、有限会社アートランドへの取材を行った。各企業を2~3回訪問し、各社の社長へのインタビューをし、1月末までディレクター

とのやりとりが続き、ようやく完成させることができた。取材映像は2月にTKFのホームページ(<https://www.tkf.or.jp>)に掲載された。

臨地実習の初年度ということもあり暗中模索の部分もあったが、TKFの協力のもと充実した実習を行うことができた。TKF所属の企業でインターンを経験した学生も数多く、就職を希望する学生も出てきている。2022年度もTKFとの交流を大切に維持しながら、企業と学生が相互に関わることで企業力アップ・学生の問題解決力の向上につながるように支援したい。

【東京キャンパス 報告⑥】

担当教員	倉内尚士・熊田陽子
ゼミ生数	20名
実習先名（製品）	株式会社 黒沼染工場（染色）
実習先住所	東京都江戸川区西小松川町
実習期間	2021年7月1日～31日／2022年2月5日～26日

本ゼミでは、東京都繊維染色協同組合との取り組みを通して、物づくりにおける商品企画から生産、流通に至るまでのプロセスを学び、以下を目標として設定した。

- ・学生が物づくり、流通を理解した商品企画をできるようになる
- ・学生が売り場や市場（マーケット）を理解した商売を構築できる
- ・学生がアパレル業界で即戦力となれる力を手に入れる
- ・ゼミとして、一過性でなく将来性のある取り組みを構築する

なお、本ゼミの実習の過程では黒沼染工場のほかにも、川合染工場、内田染工場にご協力をいただいた。

本実習は、7月に実施した第Ⅰ期と、翌年2月に実施した第Ⅱ期に分かれる。第Ⅰ期は東京都繊維染色協同組合のご協力により、黒沼染工場をはじめ、川合染工場、内田染工場にて、業務内容と染色の基礎知識について講義を行っていただいた。これらの工場を選定したのは、担当者（倉内）が商品企画の仕事に従事していた際に取引していた企業からの紹介もあったが、教育活動において実習や見学などで協力を継続的にいただけること、さらに、企画、制作、販売にいたる「ものづくり」のすべての工程が一挙に学べる貴重な場であるという理由からであった。染色の歴史やその手法に関する詳細な説明は現場の方ならではの視点・内容であり、実物の紹介やスライドとも相まって非常にわかりやすいもの

であった。さらに、黒沼染工場内の実際の現場（染色・プリント）を見学する機会もあり、大変貴重な経験となった。

この講義は大学における通常の授業では得られない実務に特化したもので、染色における日本の安全基準と欧州の安全基準には大きな差があり、日本のレベルは大きく遅れをとっているということも学んだ。一般的には日本の安全基準は非常に厳しいという印象があるため、この事実には学生たちも非常に驚いた様子であった。化学染料が用いられる染色においては、SDGsが極めて重要な観点であることも学んだ。実際の現場の見学を通じて、商品がどのような流れでできあがるのかはもちろん、それがいかに手間のかかる業務であるのかを具体的に確認できたことは、学生たちにとって非常に有益なものであったと思われる。緊急事態宣言発出のため途中で断念せざる得なくなったものの、さまざまな染色・加工の見学と物づくりの体験を通して、商品が作られる工程や商品がユーザーの手元に届く流通過程などを具体的に確認し、理解を深められた。

上記の講義および見学の実施後は、学校にて改めて学習した事項の確認を行なった。商品原価の考え方や工賃、物流費を含めた上代設定の議論、企画を立案するうえでのポイントなどを各自研究し、それぞれ発表した。物づくりをじっくり研究したことにより、単なる思いつきではない、論理的かつ説得力のある商品企画を考えられるようになったと感じる。



100年の伝統と匠の技



～世代を超えたものづくり～



写真1 ウェブサイトの企業案内のページより

第Ⅱ期では、一連の生産過程が一箇所で把握できることから、おもに黒沼染工場にて就業体験を実施した。大正5年（1916年）に創業した黒沼染工場は優れた染色・加工の技術を持つ企業であり、Tシャツを主とした総合繊維製品の企画ならびに製造販売を行っている他、顧客のアイデアを形にする各種製品の受注も行っている。また、同工場の商品企画部では染色技術やプリント印刷の技術を生かした企画開発に従事している。さまざまなジャンルの外部スタッフを積極的に招いて企画会議を開催し、ウェブサイト（<http://kuronuma.co.jp>）を通じて新商品を発信している点もユニークな特色である。

他にもメリヤス染色部、製品染色部、プリント部という3つの部門があり、メリヤス部門はスピード、コスト、品質の厳格な管理はもちろんのこと、素材の調達も担当している。製品染色部は50年の経験をもったベテラン技術者が生産に携わっており、たとえば、反応製品染めでは1日あたり2万枚の染色が可能となっている。プリント部は製品にシルクスクリーンで印刷加工を施したり、原版を色別に分けて製版し一色ずつ刷り上げるシルク印刷などによってさまざまなオリジナル

プリントにも対応している。写真にあるこうした現場を黒沼公雄社長自ら案内、説明いただき、学生たちの理解をいっそう深めることができた。

さらに、学生たちは黒沼染工場が企画・提案をしている「KRED企画」に参加し、各自の企画提案を工場の企画デザイナーに見ていただく機会を得た。事前の講義や見学、物づくり研究が下地を成したことにより、現実に即した商品企画ができたのではないかと感じる。やや新鮮味に欠けるプランも散見されたが、実際に製品として展開してみたいと思っただけの企画も提案できたことは本ゼミの成果と考えている。

今年度は不安定な社会状況という想定外の影響があり、予定していた内容の変更が少なからずあったものの、商品を作って売ることのおもしろさと同時に、その難しさを体感させることができた。また、この経験をネットショップの運用に発展させ、ゼミの総括としての最終成果発表を行う予定もあり、学生には消費者目線だけでなく、作り手目線を確保したうえで、さまざまな物に触れ、企画を立案できるようになることを期待している。

【大阪キャンパス 報告①】

担当教員	藤井輝之
ゼミ生数	7名
実習先名（製品）	妙中パイル織物株式会社（パイル織物）
実習先住所	和歌山県橋本市高野口町向島
実習期間	2021年6月2日～15日／2021年10月6日～27日

妙中パイル織物株式会社は1950年9月に設立され、現在の従業員数は50～60名である。パイル織物とは、生地の基布に毛（パイル糸）が織り込まれている特殊な有毛布地である。独特な光沢や風合いをもち、高級感がある。近年話題になっている「エコファー」も高野口産地で生産されているパイル織物の1つである。伝統的な技術を活かして、現代のテクノロジーを支える素材を生産しており、温故知新の極みと感じたことが、この実習先を選んだ理由である。

妙中パイル織物では、液晶パネル用ラビングクロス、電子材料用クロス、車輻・航空機用モケット、衣料用ベルベット、イス張りカーテンなどのインテリア用ベルベット、両面パイル毛布といったパイル織物を生産している。世界的なファッションブランドと提携するだけでなく、国内外の著名な電子機器メーカーに電子材料の素材を提供している。また阪急電鉄や新幹線の車輻用シート、航空機のファーストクラスのシート、国会議事堂の椅子や皇室の馬車の座面といったシートの素材も生産している。その功績から、2021年11月には妙中清剛社長が黄綬褒章を受賞された。

JR高野口駅前から徒歩15分に位置する敷地面積11,050坪、建物面積5,774坪の工場には、織機として、レピア式ドビーベルベット織機43台、ジャガーレピアジャガードベルベット織機19台、シングルジャガードワイヤー織機9台、加工機として、ブラッシング・シャーリング機、ピンテーターエンボ

ス加工機など、染色機として、スターフレーム染色機、プリント機、チーズ染色機、ウィムス染色機、ワッシャー機、液流染色機などがあり、織り、染色、加工の各工程を体験することができる。

前期（6月）は、高野口の本社にて、妙中社長による会社概要の説明から始まり、社内と工場内の見学の留意点を確認した後、実習がスタートした。7人を2人、2人、3人のグループに分け、ローテーションすることで、全員が同じ内容を体験できるようにした。まず、糸は切れるものということから、切れた糸を繋ぐことを学ぶ。当社では機械により自動化もされているが、今回は手で結ぶ工程を学んだ。筆者も体験したが、細く繊細な糸を結ぶ行為は、結構大変である。その後機械の仕組み、巻き糸の工程、使わない糸の処理、ループカット、パイル地の織り方、検反、出荷など、全工程を体験する。高熱の場所や鋭い刃物を使用される機械も多く、安全に配慮しなくてはならない場面が多々あった。

サンプルルームには、今まで培われてきた貴重なサンプルが豊富にあり、学生たちはそれらに触れながら、SDGsに対応した商品の開発や、その商品をネット販売につなげるミーティングを日々実施した。ハイテク素材やメイク用のパフ素材などの繊細な素材を管理するため、クリーンルームも完備されている。高度な技術を持つがゆえに、難易度の高い依頼が多いとのことだが、所有している機器も含めて貴重な技術を有する企業といえる。

座学では、高野口の歴史や地理、有名クリエイターとの取り組み、妙中社長による中間おさらい講義が実施され、紀州繊維工業組合への訪問も行った。

後期（10月）は、妙中正司常務が毎週、本学大阪キャンパスに来校され、素材の生産背景や在庫状況、サンプルの使用調査、販売ルート、海外販売の可能性、価格など、商品を実際に開発し、生産するために必要な情報を学生たちに伝えた。学生たちはそれに答え、外注生産と自社（妙中パイル織物）生産の適切な選択、コスト計算と原価率の計算、ネット販売・卸売・直販という3パターンで販売を可能とするための方向性を示した。具体的には、海外実習Ⅰと関連付け、メイク用パフの商品サンプルを開発し、使用テストも経て、海外販路に提案するための取引条件を検討した。

臨地実習Ⅱに関しては、寝装品（カバー

リング）の製造・販売メーカーに依頼し、クッションカバーの小ロット生産を実施した。ブランド名としては既存ブランドの「taenakanonuno」のラベルを使用し、妙中パイル織物と本学のインスタグラムのアカウント名は「pileun.official」と決まった。ネット販売はBaseを想定し、展示会での実売も実施するなどの多様なPRと販売計画を立てた。海外販路向け商材については、大阪モード学園メイク学科講師の森沢敏充氏へのインタビューを実施し、素材の起毛度合いとファンデーションの絡み具合などの優位性と実用性を確認した。クッションカバーの生産は、シート素材で定評ある素材を、身近なクッションにして生活に取り込む提案である。工場直結のメーカーと組むことでのコスト削減と小ロット生産を同時に実現させることができた。海外実習Ⅰ、臨地実習Ⅱと関連づけながら、生産の背景にまで踏み込んだ実践的な内容になっている。



写真1 初日、早朝に起床し、集合
（写真1～5はすべて2021年6月4日藤井撮影）



写真2 概要や留意点の説明を受けている



写真3,4 工場内で説明を受けている



写真 5,6 紐を利用し切れた糸を結んでいる

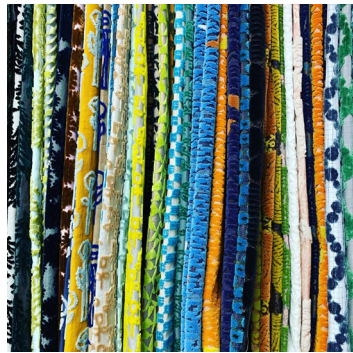


写真 7 工場内の無骨な機械に糸が整然と配置されている様子は、幻想的ともいえる美しさがある
(2021年6月4日藤井撮影)



写真 8 後期、妙中常務が来校されたときのミーティング
(2021年10月6日藤井撮影)



写真 9 海外販路向けに提案したノベルティ
(2021年11月4日藤井撮影)



写真 10 小ロット生産したクッションカバー
(2022年1月11日藤井撮影)

【大阪キャンパス 報告②】

担当教員	高原昌彦
ゼミ生数	11名
実習先名（製品）	クマムレース株式会社（レース）
実習先住所	大阪府堺市北区八下北
実習期間	2021年6月1日～30日／10月1日～29日

クマムレース株式会社は、組み紐技術を応用したトーションレースと経編で編まれるラッセルレースの2つの設備と技術を日本で唯一、有するレースメーカーである。トーションレース、ラッセルレースの企画開発、製造を行っており、現在約4000種類のレースサンプルや製品類のストックをもつ。

大阪メトロ御堂筋線「新金岡駅」から南海バスで約10分。大泉緑地公園に程近い場所に小さなアトリエのような工場がある。クマムレース株式会社は1977年にベーシックな糸とファンシーヤーンを組み合わせる独特のトーションレースを開発し成長したカツミ産業が前進のメーカーである。2020年春に同社が倒産したときに、これまで取り引きのあった山形県寒河江市の紡績・ニットメーカーの佐藤

繊維が全従業員と技術を継承し、佐藤繊維のグループ企業として、新たにクマムレース(kumamulace)株式会社を設立した。「クマム」は「組む」と「編む」の掛け合わせであり、この2つの技術を持った日本唯一の企業であることを象徴する社名である。

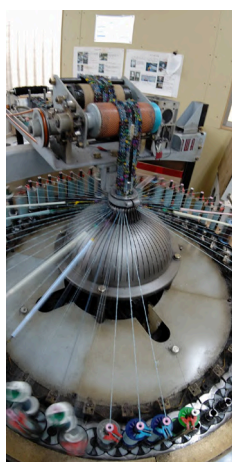


写真1 組み紐の技術で編まれるトーションレース
(写真はすべて2021年6月8日高原撮影)

佐藤正樹社長は「コロナ禍以前からモノ作りの環境が変化し、どちらかという低コストでいかに原価を下げるかに傾倒し、新しいクリエイションが受け入れられなくなってきた。ブランドも守りに入り、リスクのあるものは作らない、そんな10年だった。それに伴い急速に廃業、倒産するメーカーも増えた。今春倒産した旧カツミ産業は、ラッセルレース、トーションレースに特化したメーカーで、極端に異なる色や素材を組み合わせて独自に編んだレースをつくることができる。人材、機械を含め、一度失ってしまうとその技術は二度と再現することはできない。ヨーロッパにもない技術であり、もっと広い視野、分野で見たときに売り方を変えれば可能性があるのではないかと思い、会社と設備、技術者を引き受けて再生に向けて準備を進めてきた」と語っている [紀本2020]。

この実習先は、大阪府商工労働部 大阪産業経済リサーチセンターの小野頭弘主任研究員にご紹介いただいた。初めての事前の打ち合わせにも加わっていただき、感謝に堪えない。

本ゼミの学生は総勢11名である。当初、

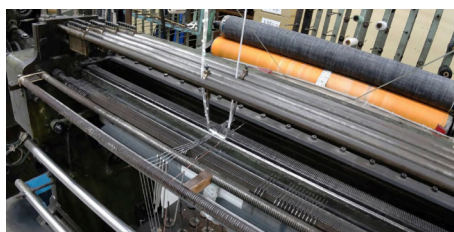


写真2 経編の技術で編まれるラッセルレース

クマムレースから受け入れ人数は3名とされていたが、レースに興味を持つ学生が多く、3～4名のグループに分け、3日ずつ実習日をずらすウェーブ方式での実習となった。

実習前に、何度もクマムレースの現場責任者である営業の谷本大志郎氏と打ち合わせを行った。「せっかく現場で学ぶのであれば、レースをつくる時に必要なファンシーヤーンの糸商『澤田株式会社』の見学と横編み機のサンプル編みの実習も加えたい」という申し出をいただき、学生たちは大阪府泉津市の澤田株式会社も訪問することができた。同社では現場見学や横編み機を用いた横編の編地サンプルを作る実習のほかに、クマムレースの社内にある糸を使って、オリジナルの糸のサンプル帳作りやオリジナルレースを作成するための糸指図書の作成まで学ばせていただいた。単にオリジナルレースの企画生産指示をするだけではなく、トーションレース機やラッセルレース編機に自分たちで糸をかけ、実際にレースを編み、さらにはそのレースを使って最終製品まで企画生産することができ、学生たちには大きな学びとなったと思う。

2022年2月9日に、お世話になった各メーカー担当者をお招きし、本学教員や学生も見学できるゼミ展が大阪キャンパスにおいて開催された。長い臨地実習だったが、自ら目標を持ち企画し行動する彼らの成長に目を見張るものを感じた。



写真3 どんなレースを使ってどんな製品を作るか企画会議。学生たちも真剣そのもの。



写真4 工場現場担当者からレースに使う糸の説明を受ける



写真5 オリジナルレースの企画指図書



写真6 クマムレースオリジナルのラッセルレース



写真7 クマムレースのオリジナルトーションレースを使った草履

<参考文献>

紀本知恵子「佐藤繊維がレース企業の社員と技術を継承 下請けから顧客の最前線へ、新しいビジネスの在り方を探る」(2020年12月18日)
<https://www.wwdjapan.com/articles/1158651>
 2022年1月27日閲覧。

【大阪キャンパス 報告③】

担当教員	三木勘也
ゼミ生数	8名
実習先名（製品）	松尾捺染株式会社（プリント）
実習先住所	大阪市中央区博労町
実習期間	2021年6月2日～18日／10月1日～15日

私たちのゼミは大阪のプリント工場である松尾捺染株式会社にお世話になった。同社を実習先を選んだ理由は、現社長が大阪商工会議所を通してグループ全体をまとめる仕事や、その参加メンバーと事業を展開されている関係で、大阪キャンパスの複数の教員とつながりがあったためだ。

捺染とは聞きなれない言葉かもしれないが、捺印の「捺」に染色の「染」の字を合わせて、染料を押して付着させること、平たく言うとプリントを意味する。生地における染色と捺染は意味が異なる。染色は生地自体の色を変える、つまり繊維そのものの色を染料を用いて変えることである。それに対し捺染は生地の表面上にインクを載せて加工する、つまり繊維そのものの色は変えず、あくまでも表面加工にとどまる。ロゴやマークのみがプリント加工と思われがちだが、全面プリントも捺染の技術で可能である。表面が総柄の色物なのに、裏面を見ると白生地に表の柄が透けて見える生地をよく見かけるが、それらは捺染の技術を用いて加工されている。

松尾捺染の創業は1926年と古く、約100年の歴史を誇る。初代の松尾治三郎は大阪の商人の街、船場で木版の彫刻事業を始め、後に船場盛進堂を起こして木版での印刷事業を行った。そして、2代目の松尾正男が松尾捺染を立ち上げて船場から東大阪へ移動し、生地プリントの大量生産に対応するために大規模の工場を営むようになった。現在は3代目の松尾治社長が代表を引き継ぎ、さまざまな先端技術や機械を用いて各種テキスタイル

商品へのプリント加工を行っている。取引先としては、国内最大規模のレジャーランド施設運営会社や、かつてプリントTシャツなどで若者の間で爆発的人気を博した裏原系ブランドなど多岐に渡る。松尾社長は1975年にドイツ、ロイントリッケン繊維工科大学においてディプロムを取得し、海外でのプリント技術に触れてきた経験をもつ。それに加え、ソフト面においてもヨーロッパのプリント模様やスタイルに対しての造詣が深く、それらの知見をもとにしたオリジナルテキスタイル開発も行なっている。それゆえ、松尾捺染の生地はヨーロッパの雰囲気を持った素材が多く手芸愛好家の間で人気も高い。



写真1 ヨーロッパテイストのプリントデザインの数々（写真1～5はすべて2021年4月7日松尾治撮影）

実習初日は松尾社長自ら、実物の機械部品を見せながら、捺染に関する講義を行ってくださいました。この実習に向けて捺染の方法や加工技術に関する予習を重ねていたため、

学生も私も興味津々で聞いた。講義のあとは工場内部や各部署を見学した。初めて見るフラットスクリーン捺染機は、大きさや数の多さ、インクが流れるチューブ群など、写真で見るとはまったく違った迫力のある装置であった。ロータリースクリーン捺染機に関しては、松尾社長がヨーロッパと同じ質で日本でもテキスタイルプリントができるようにとヨーロッパから輸入した機械を使用している。工場にはその他、生地がプリントされた後にリンスする機械、または色止めの薬品と生地を合わせる機械、乾燥させる機械などがある。さまざまな機械の内部や外部に、プリントされる前の白生地、またはプリントされたカラフルな生地が、縦横無尽、上下左右へと行き交い、まるで巨大な装置の内部にいるような感覚にとらわれる。



写真4 ロータリースクリーン捺染機

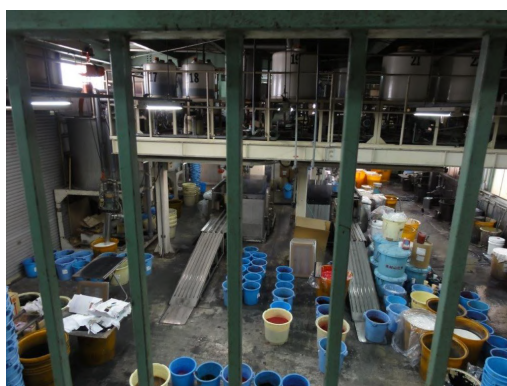


写真5 工場内で色糊を作成している



写真2 フラットスクリーン捺染機

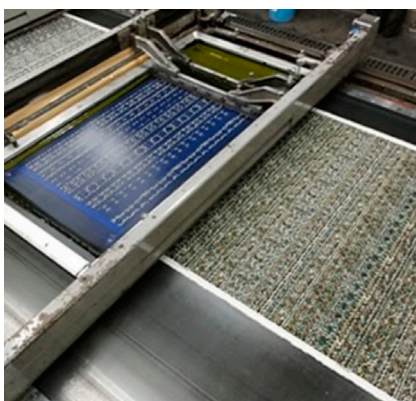


写真3 フラットスクリーン捺染機によるプリント

一方、インクジェットプリンタ部署には、無機的でクリーンなラボのような空間が広がる。そこは大型のインクジェットプリンタが2台あるのみのミニマルな空間で、極めてわずかな機械音の中、さまざまな柄の生地が生成されていく。生地を作るという工程においてここまで様子が違うことには驚く。インクジェットプリンタは、少ない水の量で必要な分だけの生地を生成できるため、地球環境にやさしくサステイナブルな時代に合っており、これからますます重宝されるようになることだった。

実習において学生たちは毎日、手捺染の実習を午前中に行い、午後はパソコンを用いてのデザインデータの作成およびインクジェットプリンタでの出力を行った。出力の技術は教えていただけるが、イラストレーターの技術は自ら習得する必要がある。そのため、

本学大阪キャンパスの木村智博教授に特別講義を開講していただき、個別指導のもとイラストレーター技術を習得することができた。イラストレーターを必然的に使わなければならない環境下で、技術の向上を図り、その成果をプリント出力できたことは、単に授業の一環として学ぶよりも多くのことが身に付いたと思う。

さらには実際に出力した素材と画面上でのデザインデータを見比べて色を調整したり、素材の厚みや質感を替えてインクの載り方を検討したりしながら製作した理想のプリント

生地を用いて、作品の製作も行った。

今回の実習では先方のスケジュールの関係上、展示会などに参加することはできなかったが、工場での研修以外にも、パターン会社でパターン制作の研修を受けたり、創業場所の本町の盛進堂でミシンの講習を受けたりするなど、プリント以外の実習もプログラムとして組んでいただき、とても有益な時間であった。学生の間にもこういった工場の現場を見たことは、今後の進路においても役立つ貴重な経験であったと思う。

【大阪キャンパス 報告④】

担当教員	高山遼太
ゼミ生数	9名
実習先名（製品）	任意団体 いとへん universe（京都 西陣緋）
実習先住所	京都府京都市孫橋町
実習期間	2021年6月7日～6月25日／10月1日～2022年2月4日

2014年10月から活動を行う任意団体であるいとへん universe。メンバーとして西陣緋織職人、染色作家、織物プロデューサー、ライターの4人が活動している。伝統的工芸品の一つである西陣緋には12品目の技法があり、その一つが西陣緋である。いとへん universe は、職人の高齢化や着物の需要が減る中で、若い世代にも西陣緋の魅力を伝えるため、手織りだけではなく、機械織のオリジナル製品も製作している。また同時に手しごとや織物に関する情報発信、ワークショップなど、広く伝える活動も行っている。

担当の私自身、縫製現場でものづくりに従事した経験があり、魅力ある手しごとや職人の技術をさらに知り、次世代に伝えていくきっかけにもなるのではと思います、担当した。事前打ち合わせの段階で学生に西陣緋の現状と魅力を伝える西陣緋の歴史の講義、染色体験を通じたものづくりの流れや魅力を直に感じられるようなスケジュールを組んでいただいた。

前半では西陣緋の歴史や西陣緋の特徴などについて現場で知見を広げ、後半では緋織の生地を譲っていただき、学生目線での新しい製品に昇華する目標を立てて実習を行った。現場見学も組んでいただいた。高齢の職人が多いため新型コロナウイルス感染対策でやむを得ずのスケジュール変更はあったが、葛西緋加工所、加地金襴株式会社、創作工房糸あそびへの工場見学と、洋服ブランド「図鑑」村上太郎氏のオンライン講義が、いとへん universe 代表の大江史郎氏のご尽力により

実現した。

葛西緋加工所では代表の葛西郁子氏から職人となった経緯や苦労話を交えながら緋の工程の説明をしてもらい、感銘をうけ、袷姿をはじめとする法衣生地を制作する加地金襴ではジャカード織機の構造や海外市場開拓について学び、マーケティングの難しさを学んだ。ちりめん産地の京丹後（京都府北部）においては珍しくアパレル向生地を制作する糸あそびでは、普段目にする生地の制作現場を直に見ることができたり、歓談中偶然にも東京オリンピックの開会式に着用される生地を発注する一報が入ったりと、臨場感溢れる体験となった。

前半の実習を通し、普段から気に入った洋服を何気なく手に取ってきた学生にとっては、糸から魅力ある柄の生地が完成していく様を見学することは非常に勉強になり、緋織の魅力に気づくことができたことと好評であった。また、職人との交流により、ものづくりの難しさとともに、緻密に計算された柄や思考錯誤の中で偶然にできた美しい柄があることなどを知り、多くの刺激があったと報告があった。

後半では実習や見学で実際にものづくりに触れた学生の考えるプロダクト制作、作品を販売するECサイトの構築とプロモーションを行うインスタグラムの立ち上げなどを実習先と密に打ち合わせをしつつ、ゼミとも連動しながら進めることが決まった。

代表的な西陣緋は経糸に絹を100%使用することが知られているが、大江氏のもとに

は緯糸で変化をつけたモダンな緋や、西陣緋を精密にスキャンした画像を用いインクジェットで表現した緋柄生地など、伝統を残しつつも新たな表現を模索した生地の在庫もあった。学生たちはこの中から思い思いの生地を選びプロダクト制作を行った。革小物制作を希望する学生が複数いたため、革小物の知識や職人技も知ることが必要だと考え、大阪市に本社工場を構える株式会社西川商店への見学もさせていただき、革小物制作への知識を深めることができた。

2022年2月に実施された学内発表会では、展示ブースで表現する方法やECサイトの立ち上げの検討を重ね、実現することができた。学生からは、まだまだ経験の少ないものの、いかに魅力的な表現ができるかを考えながら作業を進めることは、非常に良い経験になったと感想があった。今回の臨地実習では大江氏と出会えたことが学生にとって多くの学びになったとともに、私にとっても、引き続き学生に産地の良さを伝えていきたいという思いを強くする経験となった。



写真1,2 いとへん universe (六軒町スペース) での様子 (左:2021年6月4日,右:2021年6月22日 高山撮影)



写真3,4 葛西緋加工所見学の様子 (2021年10月29日高山撮影)

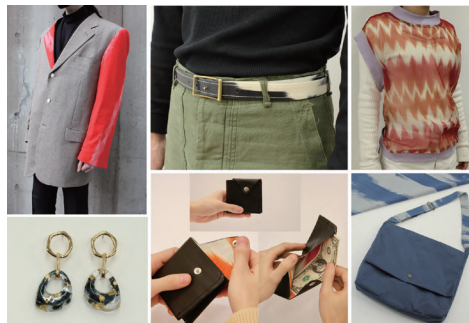


写真5 制作したさまざまな作品 (2022年1月21日高山撮影)

【名古屋キャンパス 報告①】

担当教員	奥村潔
ゼミ生数	4名
実習先名（製品）	株式会社カネコ小兵製陶所（美濃焼）
実習先住所	岐阜県土岐市下石
実習期間	2021年4月9日～7月2日／9月21日～12月1日

2021年度3年生の奥村ゼミの臨地実習Ⅱの活動を下記のように報告する。

依然として続くコロナ禍にあって、日程変更並びに現場実習期間短縮など不測の事態に見舞われた学習環境にあって、ゼミ生4名は地域地場産業を理解し、学生なりに事業発展への提案をすることができ、実習先においてこれを評価していただいた。

実習先会社概要：

創業：1921年
業容：陶磁器製造販売（陶磁器ブランド名：ぎやまん陶、リンカ）
規模：従業員20名
販売先：国内（陶磁器専門店、ライフスタイル型並びに趣味の店）
海外（ニューヨーク・ロンドンの著名専門店）
売上等：個人会社のため不明
受入先代表者：代表取締役社長
伊藤克紀氏

同社の所在地岐阜県東濃地域は、1300年以上の歴史を持つ陶磁器の産地であり、日本の和洋飲食陶磁器出荷額の50%（2019年度）を占める。しかし、陶磁器をめぐる市場環境は食生活の変化並びに嗜好の変化とともに近年、とくに中国はじめ海外からの廉価品によって、生産量は急激に減少し、1980年代ピーク時の1/5と地域産業としては厳しい局面にある。この中で、カネコ小兵製陶所は従来の安価な製品から付加価値の高い製品

への転換に挑戦し、とくに海外にその市場を拡大するという成果を上げてきた。ディオール的生活用品部門が同社の『ぎやまん陶』に興味を持ち扱い始めたことをきっかけに、ロンドン・ニューヨークへの出荷を実現することになった。地域地場産業においてこうした転換を成し遂げた点に留意し、その現場を体験し、学生諸君がどのように対峙するかが本臨地実習Ⅱの目的として、実習先とした次第である。

実習並びに提案検討は次の4期に分けて行われた。

第1期：4月9日～7月2日

- ・実習前の実習先に関する調査
- ・カネコ小兵製陶所での実習（同社外注先を含む）
- ・陶器作り体験
- ・産地関係美術館並びに博物館見学

第2期：9月2日～10月18日

- ・陶磁器に関する調査（参考図書『やきものハンドブック』伊藤社長の好意により



写真1 カネコ小兵製陶所における実習にて
(2021年6月24日奥村撮影)

無償で各学生1冊提供)

- ・カネコ小兵製陶所再訪（伊藤社長へ質問・意見交換など）

第3期：11月15日～11月29日

- ・提案検討
- ・プレゼンテーション用パワーポイントの作成とプレゼンリハーサル

第4期：2021年12月1日

- ・カネコ小兵製陶所においてプレゼンテーション

12月1日カネコ小兵製陶所において、伊藤社長並びにその御子息（次期社長）に対して実習成果並びに学生なりの提案を集約したプレゼンテーションを実施した。本ゼミ生の実績として、各自のポートフォリオに含めることができた。

評価は、同社社長 伊藤克紀氏と同氏ご子息 祐輝氏（次期社長：四代目）によって行っていた。以下、評価書の記述から抜粋。

社長：研修では食器の製造工程を体験。最終プレゼンテーションでは特にZ世代に向けて新商品、パッケージ、オンラインショップ、SNS活用によるPRを学生ならではの発想で、内容的にも弊社にとって有意義な提案をしていただきました。プレゼン進行もよく考えられ、分かりやすく良かったと思います。



写真2 カネコ小兵製陶所にてプレゼンテーション
(2021年12月1日奥村撮影)

次期社長：十分な調査と整理が行われたと感じる取組でした。そこから導き出した提案も、とても魅力あるものでした。実習中も意欲的に知識を吸収していく様子が見て取れ、今後の活躍が楽しみです。ぜひ、今回の取組にとどまらず、陶磁器の面白さを発信していただきたいと思います。

現地における実習は、全員がすべてに参加し、欠席はなかった。これは、現場に対しての興味を全員が等しく持ったことであり、未知の体験であったこともあり、充実していたようである。

しかし、実習後の状況レポート作成などにおいて、一時期全員の協力に集中度を欠いた。それは、コロナ禍にあって、登校不安、ワクチン接種による欠席が不規則に発生したことによる。欠席が目立つ学生が中間報告案作成を集中的に組み立てることにより、公平な負担感を実感することで、チームとの一体感を取り戻した。

指導内容に関する反省事項は以下の通りである。

- ・地域地場産業としての「美濃焼」に関する調査研究不足であった。
- ・地域地場産業の歴史並びに事業規模の時系列的な把握など、産業としての基盤情報は調査したものの、プレゼンテーションの資料にそれを反映できなかった。
- ・調査研究の意味とフレームを事前に明示して、誘導すべきであった。



写真3 プレゼンテーションの表紙
(2021年12月1日奥村撮影)

【名古屋キャンパス 報告②】

担当教員	大島一豊
ゼミ生数	6名
実習先名（製品）	おぼろタオル株式会社（綿織物・タオル）
実習先住所	三重県津市上浜町
実習期間	第Ⅰ期：2021年6月7日～7月2日 第Ⅱ期：2021年9月28日～10月18日 第Ⅲ期：2022年1月11日～2月9日

当ゼミの第Ⅰ期から第Ⅲ期を通した実習テーマは、「三重県伝統産業（綿織物）Z世代の視点で可能性を探る——地域の変遷・歴史・文化を学び伝統企業に貢献」である。

実習先となったおぼろタオル株式会社（以下、おぼろタオル）は、1908年三重県津市において、日本画家でもあった森田庄三郎が、パイル部分を染めずに横糸だけを染める「臙染（おぼろぞめ）タオル製造法」の特許を得て創業した。おぼろタオルは、今日、日本のタオルメーカーでは希少になってきた全製造工程の自社内一貫生産にこだわっている。どこか懐かしく、独特の優しい風合いと、使い勝手の良さが支持され、その商品は110余年にわたって多くの人に愛されている。最近では専身、専髪、専顔タオルといった用途別のタオルが人気である。伝統と革新をテーマに次々と新しい商品を開発している企業で、企画から製造というものづくりの一貫した過程をワンストップで学べるがゆえに、実習先としてお世話になることにした。

実習の第Ⅰ期（2021年6月7日～7月2日）は、三重県の歴史・文化をはじめに、地域産業、伝統産業などを調べ、収集した情報をまとめて三重県ガイドマップを作成した。同時に、おぼろタオルの森田壮常務取締役には、三重県ではどのような背景で綿織物産業が発展したのか、その経緯や地域産業の歴史・変遷についてお話いただいた。さらに、おぼろタオルの企業沿革や一貫した製造工程を工場で見学させていただいた。

また、三重県の地域特性の知見を深めるため、伊勢文化舎（三重県伊勢市の出版社）代表中村賢一氏、三重県雇用経済部・営業本部、公益財団法人三重県産業支援センターの方々にご協力いただき、三重県の伝統産業における課題や、地方創生の取り組みについて学習を進めた。第Ⅰ期は、最終的に上述の実習成果として、綿織物産業活性化を目的にZ世代の視点で新商品アイデアラッシュ、プロモーション&PR案などをおぼろタオルへ提案した。

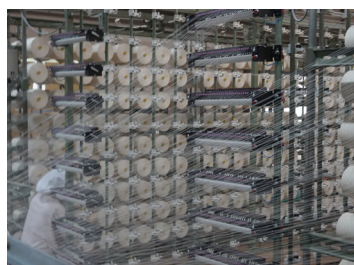


写真 1, 2, 3 本社敷地内にある一貫生産工場を見学（2021年6月25日大島撮影）

第Ⅱ期では、おぼろタオル森田常務からゼミ生へ、具体的な課題が与えられた。「タオル生地の風呂敷風活用」を一例として、新たなマーケット創造につながる商品案を提案するという課題である。途中では、三重県雇用経済部・営業本部の方から講義を受ける機会を設け、三重県の代表的な地域産業の最新動向や三重グッドデザイン制度などを紹介いただいた。第Ⅱ期最終日には、「包む・覆う・飾る・運ぶ」をコンセプトに、数々の商品アイデアと風呂敷風活用をテーマに製作したサンプルをもって、おぼろタオルで発表を行った。当日はおぼろタオル関係者だけでなく、三重県庁の職員も聴講に来られ、ゼミ生たちには緊張感もあったが、モチベーションがさらに高まる良い機会となった。

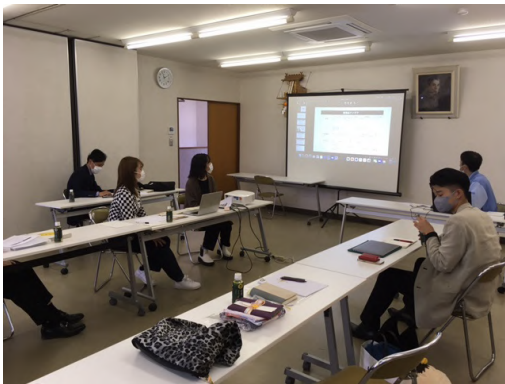


写真4 第Ⅱ期提案会の様子
(2021年10月18日大島撮影)



写真5 本社敷地内にあるショップ前
(2021年10月18日大島撮影)

第Ⅱ期終了後、新たな提案の依頼があった。森田常務は、コロナ禍に屋外レジャーであるキャンプが流行していることに着目し、若い世代からファミリーまでを取り込めば、新たなタオルのマーケットが生まれるのではないかと学生にアイデアを求められたのだ。実習期間を外れたため、ゼミ生は、Eメールとウェブ会議システムを用いてアイデアを集め、数点の提案を行った。提案の中から、コンパクト、吸水性、速乾性という機能的特徴をもつロングタイプのタオル(30×90cm)が選ばれ、自然になじむモスグリーン、ベージュ、ダークネイビーの3色を製造することになった。

第Ⅲ期にあたる2月には、このキャンプ用タオルを近鉄百貨店(四日市市)で開催された「三重のいいモノ・うまいもの発見フェア」で試験販売した。同時に本ゼミが臨地実習Ⅱで費やした300時間を、活動記録として全員で執筆編集し、今後本格化する就職活動に、ポートフォリオとして活用できるように電子書籍にまとめた。

通年で実施した臨地実習の成果としては、森田常務から二度にわたって具体的な課題をいただき、事業活動そのものにゼミ生を参画させ、「プロジェクトスタイル(組織・チーム)」で推進できたことに大きな意味があった。こうしたスタイルは実務界では当たり前だが、学生たちが在学中に300時間というまとまった時間で経験することができたのは、本学の大きな特徴だといえる。

途中、さまざまな要因で作業が滞ることもあったが、ゼミ生は壁を乗り越え、おぼろタオルはじめ三重県庁、産業支援センター、伊勢文化舎のご協力で自分たちが考案した新商品を試験販売するまでに至った。地域研究から企業研究、新商品企画、販売・プロモーションまでの一連の流れの経験は、大いに価値ある臨地実習となったと、担当教員として確信している。

【名古屋キャンパス 報告③】

担当教員	高間由美子・小山有子
ゼミ生数	10名
実習先名（製品）	①テキスタイルマテリアルセンター、毛織会館 ②公益財団法人 一宮地場産業ファッションデザインセンター （ともに尾州織物）
実習先住所	①岐阜県羽島市竹鼻町蜂尻 ②愛知県一宮市大和町馬引南正亀
実習期間	第Ⅰ期：2021年4月12日～6月30日 第Ⅱ期：2021年9月21日～10月18日 第Ⅲ期：2022年1月11日～2月9日

本ゼミは、羽島市のテキスタイルマテリアルセンターと毛織会館（以降、合わせて羽島マテセンと記す）、一宮ファッションデザインセンターという2つの施設の協力を得て臨地実習を行った。両者は日本の伝統産業である尾州織物の拠点に位置しており、近隣の企業や工場のまとめ役を担う施設である。個人では訪問することが難しい企業や機屋、染色業者への見学も、2つの施設のおかげで可能になる。

臨地実習先に尾州織物を選んだ理由は、キャンパスの在る名古屋駅から比較的近くアクセスが容易だったこと、羽島マテセン専務理事と一宮ファッションデザインセンター事務局長が以前からの高間の知り合いであったことが挙げられる。従来への付き合いが功を奏し、本学で初となる臨地実習Ⅱの受け入れ先としての協力をいただくことができた。

羽島マテセンは、日本全国のファッション衣料用素材を収蔵するセンターである。扱う素材は全国の優れた開発素材をはじめ、50年以上前から使用されている素材、最新のトレンドになっている素材など多種多様にわたる。素材サンプルの総数は10万点以上に達し、現在もなお追加で収集されているという。テキスタイル素材を収蔵した施設としては他に類をみない。

ここでは、さまざまなジャンルのセミナーを開催している。職人による素材の講習会・発表会、近隣の工場への見学など、ファッション関係者に役立つプログラムが多く準備されている。そのため、羽島マテセンへはテキスタイル企業だけでなく、近隣の美術服飾系学生、専門学校生も来館する。プロのデザイナーさえも、素材の勉強や相談に訪れる。

外部に開かれた羽島マテセンのおかげで、本ゼミ生は興味のある素材を好きなだけ見て触ることができ、聞きたいことはどんなことでも回答いただける環境にあった。人材育成をモットーとする羽島マテセンの充実した施設のおかげで、学生たちの得るものは大きかったと感じている。

一方、一宮ファッションデザインセンター（以降、一宮FDCと記す）に関しては、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言下で思うように動けず、残念ながら直接学生が訪問する機会はなかった。しかし、一宮FDCが参加した一宮名鉄百貨店主催の「布の市」のブースを任せられ、尾州織物の生地や製品を販売するという貴重な体験をすることができた。ここでは尾州生地以外に、糸や染、ボタンのブースもあった。他のブースの方々と知り合う機会にも恵まれ、声掛けをいただいた企業を、その後訪問する機会を得ることができ、幸運

であった。

第Ⅰ期から第Ⅲ期の実習期間中、通算15日(9:00～18:00)の実習が決まった。それ以外の日数は学内指導(文献による事前学習、課題など)、およびアパレル関係企業への訪問と見学を行い、またワークショップなどにも参加した。

第Ⅰ期、事前学習では大島ゼミ(実習先は三重県津市おぼろタオル)と共同で、双方の受け入れ先である周辺地域の下調べ学習を行った。調査の結果はグループごとに発表し、ゼミ生の意見交換をした。互いの訪問先についての基礎知識が身に付き、学生らの自信に繋がった。

羽島マテセンへの初回訪問時には、ゼミ生の自己紹介を行った。事前調査の学習報告は、



写真1 学内で事前調査の発表
(2021年5月21日高間撮影)



写真2 羽島マテセンで実習の打ち合わせ
(2021年6月22日高間撮影)

伝統産業の位置付け、織り、染め、機屋が現在抱えている課題についても話し合うことができた。実習内容は生地見本のハンガー作りを共同作業で行った。従来から収蔵する10万点の素材の織り方や特殊な糸の特徴、新たな素材についてのレクチャーを受けながら作業に取り組んだ。この作業によって、ゼミ生は多くの素材を知ることができた。チームで作業することの大切さも学ぶことができた。

第Ⅱ期は、学内では文献調査とレポート作成の継続、学外では他企業の別棟にある、「尾州のカレント」に参加している新見本工場の見学をした。尾州の素材を用いた服の出店



写真3 宮田毛織の工場見学
(2021年6月15日高間撮影)



写真4 長谷川商店の工場見学
(2021年9月29日高間撮影)

ブースが多くあり、織機の実演や販売商品の見学、聞き取り調査を行った。

一方、羽島マテセンでは新素材展示のためのハンガー作業、近隣の繊維企業、機屋や染色工場などの見学も継続して行った。ハンガー作業を終えた結果、素材陳列室はきれいに整頓され、来訪者からも多くの素材が非常に見やすくなったとの感想をいただいた。本ゼミ生の実習先への貢献といえるのではないだろうか。

第Ⅲ期は、各自が設定した個人の課題レポートに取り組んだ。その他に、ゼミ生は2グループに分かれ、羽島マテセンへの提案にも取り組んだ。その課題は、①後継者不足の解決策、②繊維産業衰退の回避法、③羊毛のリサイクル、④ひつじサミット、⑤尾州織物

の今後の展望、などであった。それらをまとめ、最終日を迎えた。

最終日のプレゼンテーションを受け、羽島マテセンからは思いもよらない評価をいただいた。それは、今後は提案解決に向け、努力していきたいとのことだった。ゼミ生は、一年がかりで取り組んだ臨地実習Ⅱへの思いを実習先へ伝えることができ、達成感と満足感でいっぱいであったようだ。3年次の貴重な時間を共有した羽島マテセンが、いつでも足を運ぶことのできる場となり、今後は力強い学び舎となっていくことだろう。

なお、1年を通して実施した300時間の実習の成果は、就職活動のポートフォリオとして活用できるよう1冊の冊子にまとめ、各ゼミ生の手元に残ったことを追記する。



写真5 長谷川商店でミサガ作りのワークショップに参加

(2021年9月29日高間撮影)



写真6 羽島マテセンでのグループ発表

(2022年1月27日高間撮影)

【名古屋キャンパス 報告④】

担当教員	廣田緑 (Art & Craft MH Laboratory)
ゼミ生数	6名
実習先名 (製品)	株式会社山勝染工 (名古屋黒紋付染)
実習先住所	名古屋市西区城西
実習期間	2021年4月9日～7月2日 / 9月21日～11月30日

本ゼミは、伝統的工芸品の指定項目のひとつである名古屋黒紋付染の技術を現在まで継承する、株式会社山勝染工が実習先であった。名古屋城から徒歩10分ほどに位置する山勝染工の創業は大正8年、現在は四代目が伝統を継承している。着物の需要が減るにつれ黒紋付染が衰退する中、山勝染工は2014年に自社ブランド「中村商店」を立ち上げ、黒を基調としたムラ染めTシャツ、トレーナー、ストールなどの新商品を開発している。昨今ではクラウドファンディングの活用、愛知県内の伝統的工芸品生産者とのコラボレーションなど、伝統を新たな形でPRすることにも尽力している。

私は本学で「職人の世界」という科目を担当しているため、日頃から名古屋の職人に関する情報収集を行っている。ある機会に、山勝染工の黒紋付染体験に参加したことが縁で、代表取締役社長の中村剛大氏と知り合い、臨地実習Ⅱの受入先として協力していただける運びとなった。しかし、山勝染工は百貨店などのポップアップに加え、名古屋市観光局から突如依頼される出店にも対応しており、ほぼ一人でそれに対応している社長は多忙極まりなかった。先を見通した実習日程を立てることは至難の業だった。

そこで、中村社長が社外で仕事をされる日を避け、工場が黒染を行う日には必ずゼミ生が現場で見学と研修ができるよう、次のような週間予定を考えた。すなわち、月曜は学内でビジネス系の講義（本学名古屋キャンパス岸田邦裕准教授によるサポート）、火曜は各

自が自宅で自由課題、水から金曜は山勝染工での実習とした。本ゼミはこれに沿ってまず第Ⅰ期（4月9日～7月2日）を進めた。

実習前の打合せで、中村社長は、「せっかく現場で学ぶならば、学生自身で製品を企画して価格設定し、消費者と接して販売するところまでを経験すべきだ」との考えを示された。実習期間中は新型コロナウイルスによる緊急事態宣言で、予定していたポップアップが中止になることも数回あったが、7月11日、久屋大通公園（名古屋市中区）で開催された「アーバン・アウトドア・デイ」にはゼミ生が参加することができた。展示販売するアウトドア向けのタイダイシャツをゼミ生がデザインし自ら染め、ポスターを準備して接客を行った。彼らの商品の売り上げはそれほど伸びなかったが、自身が作ったものを販売する楽しさと難しさを体験できたことは大きな学びとなったようだった。

第Ⅰ期の途中で愛知県経済産業局から本学に連絡があり、「工芸エキスポ」の学生コラボブースへの参加が決まった。「工芸エキスポ」は、経済産業省が伝統的工芸品に対する国民の理解と普及を目指して1984年から始まったもので、愛知県での開催は1986年以来35年ぶりだという。愛知県立芸術大学、名古屋学芸大学、名古屋芸術大学と本学の4大学が学生コラボに参加し、コラボ企業が生産する伝統的工芸品をPR展示することが決まった。

実習開始時には予定されていなかった大きなイベントが加わったため、第Ⅱ期（9月



写真1,2,3 山勝染工での実習の様子 (2021年6月30日廣田撮影)

では黒紋付染の過程で生まれる家紋用の白い丸抜きを活かしたネクタイ「紋角タイ」と日本の包む文化に焦点を当てた「黒紋つつみ」



写真4 久屋大通公園で開催されたアーバン・アウトドア・デイ (2021年7月11日廣田撮影)

(ともに販売)、「日々を飾る」では染め物をインテリアとして見て楽しめるファブリックパネル「黒づくし」(販売)、山勝染工から紹介を受けて見学にいった三方製作所の協力を得て行燈をイメージした照明具「黒紋行燈」(非売)を展示した(写真5)。

21日～11月30日)はコラボ商品のアイデア出し、山勝染工での染め作業、試作制作、中村社長と工芸エキスポ関係者への2度に及ぶプレゼンテーションを経て、後半は商品づくり、リーフレット、商品パッケージ制作に多くの時間を要した。

長期にわたる臨地実習Ⅱで、「工芸エキスポ」という大きなゴールに向かって現場での実習と制作を最後まで進めることができたことは幸運だった。工芸エキスポの終了と同時に、本ゼミは臨地実習Ⅱを終えた。ゼミ生とお礼の挨拶に伺った際、中村社長からは、「コラボ商品は中村商店の商品として、今後も販売が十分可能だ」との大変嬉しい言葉をいただいた。長い道程で、ゼミ生のチームワークが少しずつ強固になる様子を見ながら、彼らの成長に寄り添えたことは、私にとっても貴重な経験となった。

6名のゼミ生は、「移りゆく、黒」をテーマに、黒紋付染の新たな魅力を「身に纏う」「日々、使う」「日々を飾る」の三部門に分けて提案を行った。「身に纏う」では、若い世代が着物に興味をもてるようになるように制作した「和スーツ」、着物のように生地を一反使用し、収納の際には着物のように真っ平らに折り畳める「折り服」を展示した(ともに非売)。「日々、使う」



写真5 第38回伝統的工芸品月間国民会議愛知大会(KUGEI EXPO in AICHI) 学生コラボ展〈移りゆく、黒〉山勝染工×Art & Craft MH Laboratory (2021年11月26日廣田撮影)

【名古屋キャンパス 報告⑤】

担当教員	守屋孝典・藤沢亮太郎
ゼミ生数	10名
実習先名（製品）	有限会社 絞染色 久野染工場（有松絞り）
実習先住所	名古屋市緑区境松
実習期間	2021年4月8日～7月2日／9月21日～11月29日

本ゼミは、日本の伝統的工艺品である有松絞りの伝統技術を学び、新たな絞りの商品を提案することを実習の目標とした。実習先は、有松絞りの工房が集中している有松エリアにある有限会社 絞染色 久野染工場である。大正元年（1912年）の創業から絞りの技術を守り続ける老舗だ。

日本のファッション業界で着物や浴衣の需要が減るにつれ、絞りに染めが衰退する中、久野染工場は1993年東京コレクションに参加した三宅一生が絞りを作品の一部として使用したのを皮きりに、新たな絞りの可能性に向けて挑戦を始める。従来の絞りは着物や浴衣といった天然繊維を主流としてきたが、三宅の注文によって、化学繊維での絞りを実現させたのだ。研究を重ねた結果、服地に絞り加工を施し、さらにそれを形状記憶させる、また絞りと染色を数回繰り返すことによる新たな表現にも成功した。

こうして久野染工場は、染め絞りを量産し、形状記憶加工などができるよう、工夫を重ね、設備を充実させた。新たな技術のため、形状

記憶加工用ボイラーをはじめ、巨大圧力釜、自社で開発した絞りの機械などが揃っており、基本的な絞りの技法や染色方法に、新たな技術である形状記憶を組み合わせるなど、学生の豊かな発想や提案を実現することが可能な環境が整っている。四代目の久野剛資社長は、伝統工芸が生き残っていくためには、若者の斬新な発想を取り入れることが重要であるとの考えをお持ちである。そこで本ゼミでは、新たな発想の絞り試作を可能にする環境があり、若者の参入を歓迎してくださる久野染工場に臨地実習Ⅱの協力を依頼した。

有松で伝承される絞りの技法は100種類以上あるといわれる。ゼミ生は基本的な「根巻き絞り」「つまみ巻き上げ絞り」「豆絞り」「板締め絞り」などの技術指導を受けた。同時に鳴海・有松絞りの歴史を調査し、有松の町を歩きながら職人の声を聞いた。こうして得た情報、知ることのできた現状課題から、自分たちのできる有松の活性化についての提案を、有松絞り会館でプレゼンテーションをした。



写真1 久野染工場での実習作業風景（2021年6月9日守屋撮影）

第Ⅰ期の実習途中、愛知県経済産業局からの打診があり、本ゼミは名古屋キャンパスから、名古屋黒紋付染の臨地実習を行う廣田ゼミとともに「工芸エキスポ」学生コラボブースへの参加が決

まった。7月7日、愛知県関係者とイベント企画者、コラボを行う久野染工場関係者にに向けて1度目のプレゼンテーションを行った。7月29日には2度目のプレゼンテーションを行った。

第Ⅱ期(9月21日～11月30日)は、「工芸エキスポ」で展示するための商品制作、展示プラン、販売企画を並行して進めた。一方、毛織物の絞り加工は失敗の連続で、形状を記憶させることが困難なため、さまざまな絞りの方法を試行錯誤し、再びアイデアを出して試作をつくり、絞り、形状記憶加工を重ねるといったプロセスを何度も繰り返した。最終的には、11月24日、「工芸エキスポ」開催目前の久野社長へのプレゼンテーションの段階で、ようやく社長からゼミ生全員の作品に対して展示してもよいと合格をいただくことができた。

10名のゼミ生は、「未来の絞り」をテーマに、ファッション部門「+有松」、インテリア・雑貨部門「見てふれて楽しむ」の2部門で、Z世代に絞りの魅力を伝えることを目指した提案を行った。ファッション部門「+有松」では、ジョギング、サイクリングに適したスポーツ・ウェアと、SDGsを意識して古着に絞りを施して長く着る、使うことを訴える商品を作った。インテリア・雑貨部門「見てふれて楽しむ」では、コロナ禍を意識したアイテムを数点制作した。光で癒しを得るランプシェル、トートバック、缶バッジ、帽子、ファブリックパネルなどのアイテムは、Z世

代が気軽に楽しめる「可愛くて、持ちたくなる、身に付けたくなるモノ」だ。なかでも、失敗作や残布を活かすため、少量の生地で加工できる缶バッジを商品として発想したことは、久野社長に評価いただくことができた。

本ゼミが臨地実習Ⅱで「工芸エキスポ」という目標に向かって最後まで進めることができたことは、ゼミ生の大きな達成感となった。臨地実習終了後、ゼミ生とお礼の挨拶に伺った際、久野社長から、有松日本遺産推進協議会が主催する「有松史料調査研究・発表会」への出品依頼をいただいた。また「有松絞り 過去・現在・未来～有松絞りまちなみ美術館」(2022年2月1日～6日開催)では、名古屋市指定文化財の竹田家書院と有松駅前KONMASAビルにて実習で制作した作品を展示した。これらすべての活動は、ゼミ生が伝統工芸の技術や歴史に触れて視野を広げることができた貴重な経験と財産になった。



写真4 第38回伝統的工芸品月間国民会議愛知大会
学生コラボ展「未来の絞り」
(2021年11月26日守屋撮影)



写真2,3 久野社長への最終プレゼンテーションの様子
(2021年11月10日守屋撮影)



写真5 学生の作品を纏ってパフォーマンスするダンサー
(2022年2月6日守屋撮影)